

## 我が石炭生産に従事した頃(上) : 炭掘りし日々の記録

長弘, 雄次  
九州共立大学工学部

<https://doi.org/10.15017/13704>

---

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 11, pp.184-196, 1981-10-01. 九州大学石炭研究資料センター  
バージョン :  
権利関係 :



# 我が石炭生産に従事した頃 (上)

炭掘りし日々の記録

長 弘 雄 次

## 目 次

- 一 はじめに
- 二 修業時代
  - (一) 空襲下の授業
  - (二) 炭鉱の見学
  - (三) 石炭増産運動
  - (四) 炭鉱の実習
  - (五) 巣 立 ち
- 三 炭鉱勤務駆け出し時代
  - (一) 入社時の炭鉱に対する感懐
  - (二) 炭鉱の職種、業務
  - (三) 見習 係員
  - (四) 採炭発破係員
  - (五) 採炭 係員
  - (六) 保坑(支線)係員
  - (七) 調査研究業務
  - (八) 独身寮の生活(以上、本号)
- 四 石炭の傾斜生産
  - (一) 傾斜生産に至る経緯
  - (二) 主食、生活用品の特配
- 五 石炭の労働運動
  - (一) 労働組合の結成
  - (二) レッド・ページ
  - (三) 炭労六十三日の長期スト
  - (四) ロック・アウト
  - (五) 三池 斗争
  - (六) 合理化反対斗争
- 六 炭鉱と保安
  - (一) 地下労働と事故との闘い
  - (二) 鉱山保安法の制定と保安機器の整備
  - (三) 炭鉱の事故について
  - (四) 保安運動、安全祈願
- 七 エネルギー革命と機械化、合理化
  - (一) 其の 背景
  - (二) 機械化、合理化の推進
- 八 炭鉱の終焉
- 九 おわりに

一、はじめに

昨今石油価格の異常な高騰から、世界的なエネルギー資源の危機が叫ばれ、一九八〇年代そして二十一世紀への展望の中に、其の確保が最大課題の一つとしてクローズアップされ、最近東京で開催された先進国首脳会議に於いても、各国代表の真剣な討議の結果、一九八五年頃迄の各国の消費目標による自主制限が採択され、代替エネルギーの開発が焦眉の急とされるなど、人類の叡智が求められている。

其の確保対策としての原子力、太陽熱、地熱等のほか、過去石油との競合で敗退した石炭の利用について再度見直されてきている。

もともと自国資源に乏しい我が国に於いて、エネルギー資源の殆んどを外国からの輸入に頼って、工業生産や経済活動を維持している現況では、その供給の大幅な削減或いは長期的なストップが行われた場合は致命的である。

代替エネルギーの本命として登場した原子力発電は、米国からの事故が伝えられるなどその危険性が払拭されず、発電所建設に対するアレルギーは強く、供給は尚不安定である。

その他太陽熱、地熱等の利用についても、開発は緒に付いた許りで、代替エネルギーとして補助的なものであっても、主力とは直ちになり得ない。

而るに過去において、石油との競争に敗れたりとは云え、尚全世界に多量に賦存する石炭の再使用機運は俄かに高まり、火力発電に對する義務付を各国とも国の施策に取り入れるなど、石炭エネルギーの見直し、再利用は石油と共に茲数十年の間は石油との共存が続くものと思われる。

一方我が国の石炭資源は、少なくとも石油その他の資源に對して、その賦存条件は劣ってはいらぬもの、かつて割合に豊富に賦存し、明

治・大正・昭和の日本近代化の原動力として、そして敗戦後の復興に果たした役割は極めて大きく、昭和三十年代に始まるエネルギー革命の波に、石炭産業は崩壊し、わずかに比較的条件の良い北海道及び西九州の海底炭鉱が、国の補助を受けながら最盛期の五分の一程度の年間一千万トン余の生産を続けているに過ぎない。

現在、昭和三十年代から四十年半ば迄に「なだれ閉山」と称せられる程殆んどすべての炭鉱が姿を消した筑豊地方をはじめ、内陸部の旧産炭地では、石炭採掘に伴う地表の傷跡を回復させるための企業誘致工事や、閉山後の人口流出で過疎化した基盤立直しのための企業誘致更に失業者救済のための諸事業が国の援助のもとで実施され、昨今の地方見直しの定住圏構想の政府施策と相俟って、漸次ドンドン底から匍い上りつつあるが、未だ端緒に付いた許りの感がある。

近時、旧産炭地特にかけて全国石炭生産量の半数を産出した九州筑豊地方において、数百の炭鉱が姿を消して約十年を経過し、已に過去となりつつある石炭産業の見直し論が活発である。

筑豊に石炭は何を残したか。その功罪論的な総括にはじまって、石炭産業の政治面、産業経済面、労働面のほか、石炭産業が興った歴史的背景の研究や石炭生産に使用した機械器具、石炭産業に拘わる遺跡生活史、信仰面に至るまで、歴史的な或いは郷土史的な色彩さえ帯びた客観的な調査研究が盛んになりつつある。

又其の資料は直方市石炭記念館のほか、田川市に大々的な石炭記念館建設の計画が進み、筑豊炭鉱遺跡研究会などかつて石炭に関係のあった人々の活発な保存運動など、大切に保存されるべきであるとの地域社会のコンセンサスが広がりに見受けられる。

この事実は、石炭衰退が与えた大きなショックから漸やく立直りつつある筑豊地域の住民にとって、冷静に石炭産業が日本近代化に果たした役割とその意義、そして衰退と共に味わった苦しみを歴史として後

世に残し、役立たせたいとの願いを心に持ちはじめているものと考えられるのである。

日本の産業の進展と共に歩み、エネルギー革命と共に没落した、その歴史的現実と、国家経済の今日迄とってきた国の施策の適否が、再び石炭見直しの世界的世論の中で、今日程問われているときはない。

今、「我が石炭生産に従事した頃」と題したテーマで過去の記録の一端をまとめることとしたが、主として戦後石炭増産時代から、エネルギー革命による炭鉱閉山衰退迄の石炭産業百年の歴史の内、最後の四半世紀について、自己の体験を通して、石炭産業とは何であったかを、石炭生産の第一線で過した探炭技術者の立場から、石炭エネルギー史の一断面について取り纏めることとした。資料が殆んど無いため、過去に対する記憶をもとに記述したので或いは誤謬があり、又独断的な物の見方があるかと思われるが、その点は予め諒承を得たい。

## 二 修業時代

### (一) 空襲下の授業

戦争も日本の敗色の濃い昭和二十年頃、産業戦士の一員とされ、兵役の猶予を受けた探鉱学科学生は、B 29 爆撃機が一筋の飛行機雲を福岡の上空になびかせながら飛びかう間際まで黙々と授業を受けた。

山田教授(後の九大学長)は探鉱学を英語のテキストで熱心に講義された。戦争の熾烈な戦の最中に、相手国の言語が軍の命令で禁止されている中においてさえ、広い視野に立った人々は、国運の進展のためには世界の知識を吸収する必要のあることを、身をもって学生に教えられたに違いない。

全国各地においても、学問・技術の継承は国境を越えて若人に教えつがれ、それが敗戦後いち早く外国の技術を取り入れ、復興の原動力

として発揮されたものと考えられる。

夫々の志望はあったにせよ、探鉱学科学生は戦争の中で地下資源開発のための研鑽を続けたのである。

### (二) 炭鉱の見学

昭和十九年十月入学したクラスメイト二十六名のうち、炭鉱、鉱山の生活を知らない者が半数以上おり、小生もその一人であったが、講義や諸先輩の話などから、一般社会と一寸異なった特異な社会のように考えられた。

戦局利あらず、文科系学生は学徒動員、なかには特攻隊員として戦場の第一線にあり、理科系は鉱山に動員されたため、二学年、三学年生は各炭鉱に配置されていた。その慰問を兼ねて、炭鉱見学が数班に分かれて行なわれた。

佐賀県の杵島炭鉱では、已に禁止されていた女子の坑内労働が、戦争の人手不足のため女子挺身隊として認められ、探炭の第一線で炭鉱で真黒になりながら、男子探炭夫と共に働いていた。

非常に坑内温度が高いために、上半身殆んど裸体であった。ブーンと厚化粧の女子の白粉の匂いが鼻をついた。暗闇の中、キャップランプの光に照らされた女子の姿はなまめかしい許りである。聞くところによれば、厚化粧は炭じんが肌に入らないための自衛手段であるとか。山本作兵衛氏の著作には、明治・大正時代の女子坑内労働の状況が画かれているが、戦時中、国家存亡の秋には再び行われていたのである。

又飯塚市にある日鉄二瀬炭鉱では、初めて堅坑のケーシングに乗って数百米の坑内に下った。そのときの緊張感はまだに忘れない。明治・大正時代の幼稚な設備から脱して、当時としては両炭鉱とも近代化した炭鉱と云われた。

杵島炭鉱の長い斜坑人車から、そして、二瀬炭鉱の堅坑から降りて

地底数百米の坑道を歩いたときの感じは、今迄経験したことのないものであった。ヒンヤリとした冷氣、天井から所々雪が落ちる。かび臭い空気の匂い。汽車のトンネルや鐘乳洞に入った時とも違う地底の状況である。

採炭切羽への道は、時々炭車が通る。騒々しさと静寂さの交叉する中を、キャブランプを頼りに案内人のあとに続く。採炭切羽、機械室など色々な設備を見ながら、ついてゆくのが精一杯である。

数時間後に昇坑し、地上の太陽を眺めた時のほっとした気持、しかし全く見たことのない坑内の物珍しさが先に立って、危険な作業場との認識が薄れていたようであった。

先輩の方々は歓待してくれた。戦時中の食糧不足の折にも拘らず、出来るだけの御馳走を用意してくれたのである。あとでわかったが、鉱山一家と云うか、危険作業の中で力を合せて生活している炭鉱生活者の連帯感の強さがあり、同窓生の繋りは強く、又当時は炭鉱が一人でも多く若い技術者を求めている時代の背景があったからでもあろう。筑豊地区は石炭貨車がひっきりなしに走り、客車はその合間を縫って通っているようで、正に日本の産業は石炭で動いているような気がした。

このようにして、全く未知な炭鉱に対する認識を少しずつ身につけはじめると、採鉱学という一般社会と異なった学問の違和感を持つ者も、逐次順応していったのである。

なかにはこの炭鉱見学によって、採鉱技師への道が性格にあわないと、他の方面に転進した者もあった。

### (三) 石炭増産運動

昭和二十年八月、日本は戦争に敗れた。軍国主義に踊らされたとはいえ、大多数の国民は一旦開戦後はやはり祖国の運命を担って、夫々

の持場で努力した。若い学生と同様である。特に文科生の同僚が戦場で戦っていたから尚のことである。連日の空襲のため、福岡市の半分は焼野ヶ原となったが、皆齒をくいしばって頑張った。

やがて戦争は終結し平和が訪れたが、人々は一時虚脱状態となった。今迄の価値判断が一举に崩れ、加えて食糧危機である。しかし、若い学生は又変り身も早い。戦後復興のため国が掲げた最初のそして最大の目標は石炭と鉄、次に食糧の増産であった。

中間市にあった大正中鶴炭鉱は人手不足で操業が困難となっていたので、学生の応援をとの要請があったため、二十一年の早々、一二月の間の約束で有志が出かけた。採鉱学科学学生の誘いに応じて、機械、電気、土木など工科系の学生の他、文科系の学生も続々志願し、たちどころに二百名程度の奉仕団を組織し駆けつけた。小生もその一人であった。

当時の学生の心情として

- ① 何かに情熱をぶつつけたい。
- ② 石炭増産という大義名分は恰好なものである。
- ③ 食糧不足に悩まされていた現実から、とにかく腹一杯米の飯が食べられること。当時は代用食が主体で米には縁遠かった。

③ インフレのはじまっていた当時、経済的な理由で、何がしかの学資の助けになること。

等が働いたものと思われる。

当炭鉱は遠賀川の右岸辺りにあり、新二坑を開発中であつたが、水の多い炭鉱であつた。

小生は坑内工作修繕夫として、鉄製のパイプを担いだり延長したり、機械の修繕をする作業を行なつた。採炭の重労働を志願したものもいた。とにかく、敗戦後のもやもやした虚脱状態の中で、何も考えずに唯肉体を酷使し、体をぶっつけて汗を流した。寮の生活で寝起きしな

がら、毎日のはげしい労働の中で、当時の学生は一体何を考えていた  
のであろうか。

その当時、坑口附近で写した写真がある。



大正中鶴炭鉱新二坑口にて

#### (四) 炭鉱の実習

当学科の学生は第一学年で基礎講義を終了し、第二学年では必ず炭

鉱・鉱山での実習が一ヶ月程度課せられ、レポートにとりまとめ、審査を受け、第三学年では、卒業論文として学内における研究施設で実験するか、炭鉱・鉱山の採炭計画、開発計画、通気計画、選炭計画など実操業に則したテーマによる卒論をまとめ、ヒヤリングを受けるのが実態であった。第二学年では、一週間程度の日程で四国の新居浜にある住友別子銅山（今は閉山で無い）で鉱山測量等の実習を行なった。而るに、背後に筑豊炭田をひかえる九州では、クラスメートの殆んどは採炭計画等を選んだ。敗戦後の国家の要請から、石炭増産の第一線に志向した当時の学生としては、当然のことであったのかも知れない。

#### ① 本山炭鉱

小生は第二学年の実習は、宇部炭田にある小野田市の本山（もとやま）炭鉱という、月産当時三千屯級に減少していた海岸の炭鉱で、二十一年の夏の一ヶ月を過ぎた。

実習は、その炭鉱の地質炭層状況、開坑の状況、採炭、掘進、保坑機械設備、選炭状況、福利厚生施設までの炭鉱全体の操業状況の取り纏めである。水の多い当海底炭鉱は、戦後の台風被害による長期停電によって坑内が水没し、実習当時は坑口より斜坑千米位まで回復し、採炭開始した許りであった。この炭鉱を実習先に選んだのは、この頃珍しく斜坑の運搬をベルトコンベヤーで行っていた機械化のすすんだ設備をもっていたからである。

天盤からポタポタ落ちる雫は海水の塩からさがあった。敗戦後から一年余で、人員不足などで操業は不安定なようであった。しかし従業員は親切なようであった。夢中で一ヶ月の間坑内外を駆け回り、資料を蒐集して過ぎたようである。詳しい記憶がよみ返らない。唯、八月のお盆の盆踊りの輪に入って、海風を受けながら踊った思い出がすかにかにあるようだ。

当炭鉱は炭層厚さ一・三米〜一・五米程度の五千カロリー代の褐炭で、早く閉山したようであるが、今はどのようなになっているか。恐らく都市化の波の中で住宅が立ち並び、昔の面影は殆んど残っていないに違いない。

## ② 三菱美唄炭鉱

第三学年の卒業論文は、北海道石狩炭田にある三菱美唄炭鉱であった。敗戦前まで諸先輩は、満州の撫順炭鉱や北支大陸の炭鉱まで実習に出かけて行った。敗戦後、国内では最も遠い北海道を選んだのか、又夏の北国にそこがれたのか、その動機はしかと思ひ出せない。

二十二年五月、学校の紹介状を片手に、門司港発日本海まわり小樽行き不定期貨物船に乗り、札幌を経て炭鉱を訪れた。汽車は当時、復員、引揚列車が人々を鈴なりに乗せて走り、本土を縦走して北海道に渡るの中々困難であり、飛行機は勿論その飛行を禁じられていた時代である。学校からの依頼状は届いていたが、住宅難のため今年の実習は受入れ難いとの事であった。が、遙々九州から来たというので、出来るだけ短期間に修了することで受入れてもらい、毎日坑内探炭現場の調査を行なった。当炭鉱は北海道における三菱系の主力炭鉱であり、当時月産七万屯余、炭層条件も良好で、高品質にめぐまれ、近代設備が整い、美唄炭鉱鉄道線が引かれ、美唄炭鉱駅などもあり、山合いの企業城下町的な炭鉱町を形成していた。宿舎は炭鉱の好意で、常盤台というクラブを利用して戴いた。

当炭鉱では、一つの区域の採炭責任者を事業方（じぎょうかた）といい、今でいう係長クラスにN氏がおられたが、学校は異なるが非常に世話になり、家庭にも呼ばれて歓待を受けた。後、三菱の役員になられたが、何れにしても、炭鉱という運命共同体的な所で業務に携わっている人々の同志として迎えてくれる暖かさは、前にも触れたが他の社会と異なつたものがあり、それが条件的にめぐまれていない日本

の炭鉱を最後まで支え、日本経済に果たした一つの推進力になつたのではないかと考えている。

後年北海道の炭鉱に転任勤務し、同じくクラスメートで三菱鉱業に入社したH君が、同炭鉱に勤務していた昭和四十一年頃訪れて一夜を過し語り合い、そして若き日の実習時代を思い出して感無量なるものがあった。しかし、当炭鉱はエネルギー革命の中閉山して今は無い。

## ③ 三菱芦別炭鉱

美唄炭鉱のクラブに宿泊して調査を行なっているうち、三菱の筑豊地区の主として地質関係を担当していた技師が五〜六名で、S氏（後三菱鉱業の役員となる）を主班にクラブに宿泊し、石炭増産の国家的要請に基づき、石狩炭田北部の芦別地区の開発のため地質調査をはじめた。S氏のすすめで地質調査に加わり、六月の一ヶ月間、芦別の山中で飯場小屋での電気のないランプ生活で、藪蚊に悩まされながら、谷間に出ている露頭線の調査などを本格的に行つた。炭層は良質であったが、比較的断層が多いようであった。S氏の助言で、卒論として当鉱の開発計画をまとめ得たのは幸いであったが、後年経験を得て振り返ったときは幼稚で、審査のヒヤリングでは冷汗をかけた。後に開坑して芦別炭鉱として操業したが、三十年代にはやはり断層が多く閉山、姿を消した。

クラスメートで北海道の炭鉱に実習に来ていたのは、小生を含めて四名であったが、卒業前の思い出に北海道を一周しようということになり、七月のはじめ、三井砂川炭鉱に集結し、大雪山、阿寒を経て釧路炭田雄別炭鉱の坑内見学を併せ行なった。数名の先輩がおられ、なつかしがつて歓迎してくれた。

見も知らない学生に対し、事業所内を案内し、クラブに無料で泊めて歓待してくれるなど、現在の社会情勢では想像出来ないが、これも前述の通り、時代が若い採鉱技術者を要請していたのか、鉱山一家の

長い伝統によるものか、恐らくその両方であったに違いない。

### (五) 巢立ち

以上の様な経過を経て、クラスメートは昭和二十二年九月学窓を巣立ち、殆んどが石炭界に身を投じ、石炭増産の現場に人生の第一歩を歩むこととなったが、二十六名の級友の八割が炭鉱志向であり、金属鉱山関係は一名も居らなかった。参考までにその就職先を列記すると、三井鉱山二名、三菱鉱業二名、住友石炭鉱業一名、古河鉱業二名、日鉄鉱業二名、日本炭鉱三名、明治鉱業二名、貝島炭鉱二名、久恒鉱業一名、小倉炭鉱一名、宇部興産一名、松島炭鉱一名のほか、通産省関係三名、学校外三名といった状況で、敗戦後の混乱時期における日本復興の原動力としての石炭産業に対する使命感みたいなものが、クラス一同の胸中を支配していたのであろうか。

これから夫々石炭産業の一端を支え、そしてエネルギー革命で離散してゆかねばならなかった苦斗の歩みが始まるのである。しかし、当時誰が石炭産業の衰退を予知し得たであろうか。

### 三 炭鉱勤務駆け出しの時代

#### (一) 入社時の炭鉱に対する感懐

昭和二十二年十月、小生は同クラスのO君と機械科出身のH君と三人、古河鉱業に入社が決まり、筑豊は田川郡添田町、川崎町、大任町にまたがる大峰鉱業所に配属された。数日の坑内見学のあと、その中の大峰炭鉱の坑内係にまわされた。現在のように数ヶ月の訓練期間もなく、即生産現場である。敗戦後二年を経過し、漸やく敗戦後の混乱期を通り抜けて、傾斜生産による石炭増産に各炭鉱が取り組みはじめた頃であった。

炭鉱とは新しく入社した我々に如何に映ったか、当時の感懐はどのようなものであったか、その主たるものは凡そ次のようであった。

- ① どの炭鉱も、駅を降りてから同じように、炭鉱を中心とした町の雰囲気は似通っていること。
  - ② 坑口を中心にして事務所、工作工場、選炭機、坑木場、そして硬山がそびえ、それらを取り巻くように炭住住宅が並び、購買会、病院などの厚生施設があり、一つの独立社会を形成していること。
  - ③ 事務所はバラック建てに近い貧弱な建物が多いのに反して、設備には割合に金をかけていること。
  - ④ 筑豊はどこに行っても石炭の町で、日本のエネルギーを支えている感が強かったこと。
  - ⑤ 都会から離れた社会で文化的なうるおいに欠けており、人々は公休日には文化の匂いを求めて、よく町に出かけていること。
  - ⑥ 坑内は三交代の作業が続けられており、昼夜炭車を坑内から捲上げる捲上機や、炭車の走る音が絶え間がないこと。
  - ⑦ 坑内で使用する支柱用の坑木の量の大なるのに驚かされたこと。
  - ⑧ 坑内作業はかなりの重労働ではあったが、採炭作業場への距離が遠く、実働時間の短いには一驚したこと。
  - ⑨ 事故に対して、炭鉱全体が敏感に反応すること。
  - ⑩ 危険作業的な要素からか、従業員はその日一日を暮らすことに重点をかけ、将来をかけた生活設計が仲々行われていないようであること。
  - ⑪ 戦前、戦時中苛酷といわれた坑内労働は、戦後労働組合が結成され、特に烈しいようにも感じられなかった。この点はあとで振り返ったとき、労使とも戦後の虚脱から漸やく抜けはじめたものの、どの様に対処してゆくか模索の無風時代であったようである。
- 以上の通り、採炭技術者として石炭会社に就職した立場からは、全

く客観的に眺めることは出来なかつたようで、今後如何に早く職場になれ、石炭生産の一翼を担えるかという意識が強く、かえって前述の学生時代の方が印象は強烈だったようである。全く関係のない人が見た場合は、もっと異なつた見方がなされたかも知れない。

## (二) 炭鉱の職種、業務

ここで石炭生産をするための炭鉱の業務内容、職種について、簡単にふれておこう。

先ず、坑内最前線の採炭現場（切羽きりばという）で作業する者を採炭夫といい、その業務には穿孔夫、発破夫、機械運転夫、積込夫、支柱夫等があり、先ず炭層に孔をあけて爆薬を詰めこみ、発破により破砕して小塊状にするか、機械によつて切崩すか、或いは人力によつてつるはしを振つて石炭をとり出すかして、坑外に搬出し易い状態とし、（炭すす作りという）、人力によるスコップや機械によつてコンベヤーや炭車に積込んで、坑外に搬出するための切羽中の作業を共同で行つた。

採炭切羽を準備するための坑道を掘り進む掘進夫、坑道や切羽などを維持する保坑夫（支線夫ともいう）の三職種を坑内直接夫といつても最も重要視され、傾斜生産時代は米の特配量も最も多く、賃金も高かつた。他に、掘進箇所新しい空気を扇風機で送り込むための風管を敷設したり、採炭切羽の隅まで新しい空気をまわして、ガスがたまるないようにする通気戸（風門）を管理したり、採炭跡でよく発生する自然発火防止のための密閉作業などをする保安夫（通気夫）を直接夫に入れる炭鉱もあった。又、坑道や切羽の位置を測定する測量夫も大事な仕事であつた。採炭切羽等で石炭を積んだ炭車を斜坑、立坑などを通して坑外まで捲上げなければならぬが、それに従事するものを運搬夫（掉取）といい、身軽さを要求された。この作業員の意向で、夫々の採炭箇所への炭車のまわりが良くなつたり悪くなつたりするの

で大事にされ、出来るだけ機嫌を損なわぬように気を使った。捲上機を運転する捲方や、炭車の通る軌道の保線をする軌道大工、採炭機械やコンベヤーなどの運搬機及び機上機等を設置補修したり、圧縮空気を送つたり、湧水を坑外に排除するためのパイプを延長したり、ポンプを据付けたりする機械修繕夫、ポンプを運転するポンプ方、これらの動力源としての電気設備をする電気夫など、坑内で作業する直接夫以外の職種を坑内間接夫といつた。

坑外関係では、掘上げた石炭を選炭場まで運搬し、水洗いし製品として市場に出すまでの一連の作業を主体に、それらの機械の維持管理をしたり、部品の補給をしたりする修理工場、圧縮機の運転、変電所などの管理、坑木をはじめ生産に必要な資材管理をする資材係や経理関係、特に炭鉱では人力のウエイトが大きいため、その出勤の督促や鉱員の募集など労務者の管理をする労務係が、他の一般産業と異なり大きなウエイトを占めていた。

福利厚生施設としての購買会や病院、更には従業員慰安のための映画館をもっている炭鉱もあり、炭鉱という一つの独立閉鎖的な社会を形成しており、一通りなものが揃つて、それで生活出来る仕組みになつていた。

職種別の一覧表は次頁の表の通りである。

## (三) 見習係員

当炭坑は昭和十四年八月、蔵内鉱業から譲り受け、深部採掘に移行するため起業投資を行い、従来の沿層斜坑による行き詰りを岩石坑道による骨格坑道の切換を行い、深部の採炭の結果優秀な田川三尺層という炭層を確認し、月産五万屯体制を目標とする古河の主力炭鉱として浮上しつゝあり、非常に意気が上つているところであつた。

炭 鉱 の 職 種 ・ 業 務 別 一 覧 表

炭 鉱 の 職 種	坑内夫	直接夫	採 炭 夫 …… 採炭切羽で直接採炭に従事する穿孔夫、積込夫、機械運転夫、支柱夫、曲片運搬夫等
			掘 進 夫 …… 採炭切羽の準備をする坑道掘進に従事するもの
			保 坑 夫 …… 採炭切羽の維持、坑道の保持をするもの
			保 安 夫 …… ガス排除の通気風門の管理、掘進箇所風の延長などに従事
	間接夫	坑 内 雑 夫 …… 発破助手や測量作業に従事するもの	
		運 搬 夫 …… 掉取ともいい、斜坑、豎坑捲上の炭車の操作や水平坑道の電車運転従事者	
		軌 道 大 工 …… 軌道の修理夫	
		運 転 夫 …… 捲上機の運転や、ポンプ、圧縮機など機械の運転管理	
	坑外夫	機 械 修 繕 夫 …… パイプの延長や坑内機械を運転する者(内修)	
		電 気 夫 …… 電気施設の保持(内電)	
		運 搬 夫 …… 坑外掉取、硬捨夫	
		運 轉 夫 …… 捲方、機械運転夫	
			機 械 修 繕 夫 …… 外 修
			電 気 夫 …… 外 電
			選 炭 夫 …… 選炭婦、選炭夫、分析夫、送炭夫
			営 繕 夫 …… 営繕大工
			坑 外 雑 夫 …… 労務、総務、資材、修理、購買会、病院他

早速現場に割当てられ、掘進箇所の見習係員としての生活が始まった。学校で習ったことはまず役に立たない。一班の編成人員が四〜五名程度の三交代作業を、一週間毎に昼夜の勤務時間を変更して作業をすすめるわけである。

係員の作業の内容は凡そ次の通りであった。

(イ) 入坑時に人員を確認して報告の上、人車に乗って坑内に下り、その日の作業に必要な爆薬を坑内火薬庫で受取る。鉱員の場合は資格がないので、火薬の取扱いは係員の主な業務の一つであった。(発破係員)

(ロ) 作業現場では、天盤の状態、ガスの異常の有無を確認し、鉱員(戦時中から産業戦士といわれ、段々鉱夫を鉱員と名称を変更していった)に作業の指示をし、作業中は定期的に天盤側壁の点検、ガスの測定など保安に留意する。(保安係員)

(ハ) 作業を円滑にすすめるために、必要な炭車数量の請求や、通気確保のための風管延長、軌条の延長など関係先に依頼。

(ニ) 穿孔機で炭壁にあげた一・二〜一・五米位の深さの孔に爆薬を詰め込み、作業員を避難させて警戒人をつけ発破作業を行い、

(ホ) 作業員から受取った伝票に、工事番号(作業箇所によって毎月請求単価が設定されるが、その工事番号を記入することにより一ヶ月の総延人員を集計し、測量係が検収した掘進米で請負総金額が算出され、それを各人の技量により先山一・三人歩から後山〇・八人歩迄の間で配分差をつけて支払う仕組みになっていた)を記入し、捺印し、昇坑時に本人に手渡し、

(ヘ) 昇坑時は作業日誌、保安日誌、発破日誌など整理し、作業の結果は次の方の係員に申継すると共に上司に報告し、一日の作業が終了する。

大まかにいって、当時の係員の業務内容はこの程度であったが、西

も東もまだよく分らない坑内、そして作業環境である。初めて爆薬と発破器を使用して点火爆発させたとき、にぶいドスンという音を聞いたときの緊張感。(ガスの少ない炭鉱では、まだ当時、導火線により一本々々の爆薬に火をつけて発破作業をしているところもあった) 一、二ヶ月後業務になれるまでは、夢中になって過した。

採炭切羽など数十名で作業する箇所は、保安係員と発破係員が別々に業務を分担したが、小さな作業場はその両方を兼務した。従って、坑内係員は保安係員と発破係員との二つの資格を必要とした。後述するが、昭和二十四年に鉱山保安法が制定された以降は、国家試験に合格しなければその業務につかれないようになった。法律施行前からその業務についていた者はその経験によって、炭鉱の申請により審査で資格が与えられる暫定措置がとられた。

当時、国の重点政策のため米の特別配給があったが、それは出勤日毎に支給されることになっており、係員の捺印した証明がなければ支給出来ないようになっており、それによって出勤率はかなり高かった。出勤人員が少ないときは他の作業箇所の応援を求めたが、請負作業のため、応援をいやがる傾向があった。戦時中までは現場係員の権限は強かったが、戦後は状況も変り、人員の少ないときは、係員も一緒になって石炭をスコップ、エブ、カキ板などの用具を使い、炭車に積込んだ。特に若い新米である係員は、何かにつけて気苦労が多かった。戦前、戦時中まで続いた、すべて命令による労働者の作業は、戦後を契機としてその体制が崩れ、マッカーサーによる労働組合結成指導は炭鉱にも及んでいたが、その正常なルール運営の確立は労使ともに未だ出来ておらず、空白地帯の中で、労働者も従来の職制のままに動いていた過去と新しい自由な権利の目覚めとの錯綜した中で行動していたように思われた。

#### (四) 採炭発破係員

半年たった二十三年四月頃から、採炭切羽の発破係にまわされた。会社は、採炭技師の卵に一通り採炭の第一線の仕事を経験させるようだ。他の炭鉱に勤務した級友も大同小異で、中にはスコップを持たせて一緒に採炭させたところもあり、炭鉱技術者として石炭生産に従事する以上、通り抜けなければならない関門だったに違いない。

配属された切羽は長さ八〇米位の長壁式の切羽で、傾斜十五度、炭丈二・〇米、一方の出炭は二屯炭車で一〇〇函(約一五〇屯)、人員が二五名程度であった。

毎日坑内火薬庫で、その日のダイナマイト二五〇〜三〇〇本(一本一・二・五瓦)を受取り、火薬袋に入れて肩に荷負って、採炭切羽まで約四軒の道を、人車で乗り継ぎしながら急ぎ歩いた。穿孔夫が鑿岩機で穿孔した孔に雷管を取りつけたダイナマイトを装填し、粘土を口元まで入れて爆力が逃げないようにし、発破線を張って少し離れた距離から(保安規則では三〇米離れることになっている)発破器の電流を流して火薬を爆発させ、石炭を崩した。傾斜十五度の切羽の坂道を少なくとも二〇〇〜二五〇回、距離にして一日一二軒〜一五軒を、坑内の暗いところでキャップランプの光を頼りに、足場の悪い作業場で発破の煙の中を馳足で動き回った。採炭作業も同様に請負である。当初はなかなか思うようにはいかず、発破作業に時間がかかることが多く、鉱員たちは収入が下がると不平を言った。

職員寮に帰って真黒な体を一風呂浴びて汚れを落とし、食事もそこに終るとそのまま部屋に引上げ、倒れるように寝てしまうことも多かった。

疲れて、小便は黄色を通りこして、血便さえ出た。戦争に行つたことのある寮の友人は、軍隊よりもきついとこぼした。配給される地下足袋は一週間程度で底に穴があいた。しかしここでへこたれてはなら

ないと、皆齒をくいしばって頑張った。

一、二ヶ月たつ内に、体もなれると同時に段々と要領も分り、無駄な労力を使う事も少なくなり、又鉋員たちの協力も得られるようになって、段々と炭鉋マンの体臭が身についていったのである。

#### (五) 採炭係員

六ヶ月程経て採炭の様子が分りはじめ、入社して一年位経過した頃今度は愈々炭鉋の花形といわれる採炭の係員を命ぜられた。

採炭発破係員を半年許りやってきたので略様子は分っているが、いざ三十名程度の採炭夫の業務監督を實際やってみると、なかなか大変であった。毎日採炭切羽の保安に留意し、作業前には穿孔、積込、支柱、運搬その他の作業を各人に割当(有付、番割、配番などという)するが、熟練者の欠勤が作業能率に大きな影響を与えた。当時は未だ木柱により天盤を支えていたため、周期的に天盤に重圧がかかるのでその防止が重要であり、雑多な業務を円滑に遂行するための世話役として、最も熟練した鉋員が責任者として係員を補助していた。坑内には採炭箇所が各所にあり、炭車のまわりが悪く、その確保が係員の重要な仕事の一つで、その日の出炭量の確保は、経験未熟な者にとってなかなか重荷であった。

どんな仕事でも同様であるが、監督者が若く未熟であれば作業員はなかなか思う様に動かない傾向がある。炭鉋の社会はそれが特に顕著で、よそ者であれば尚更であった。しかしその生活に融け込み、仲間意識が芽生えてくると、段々うまくいくものである。それで、春の花見や年に一度の山神祭の祭りなどの作業員グループの集まりには極力顔を出し盃をかかずなど、極力炭鉋人になりきろうと努力した。

しかし当時の採炭作業には、採炭切羽の保持、採炭の機械化、運搬の合理化、坑口から作業場までの距離も遠くて作業時間が短かく、無

駄が随所に見受けられたが、各炭鉋の共通の課題として、生産能率の向上にとりくみはじめたのである。

#### (六) 保坑(支線)係員

約一年間の採炭係員を経験すると、坑内直接作業の内保坑係員に二十四年十月頃からまわされた。主として採炭切羽の準備(コンベヤの移設、支柱・採炭跡の充填等)や坑道の維持改修作業で、裏方の業務に属するが、その良否により採炭能率に大きく影響し、係員は古手のベテラン職員を配し、作業員も採炭掘進などを長年経験した熟練者が年令・体力の関係で配属されることが多く、長年の経験と慎重さを要する業務である。それだけに、係員としては作業指示に気を使うことも多かつたが、採炭の花やかさに比較して準備作業の重要さを知らされることも多く、色々な体験を見聞しながら、地下作業の困難さを改めて知り得た時期でもあった。

ある時、採炭切羽に重圧が来襲した。高さ二米の天盤がみるみるうちに沈下してゆく。そのままに放置しておれば崩落、切羽はつぶれてしまう。作業員は危険を感じて寄りつかない状態である。熟練した先山と協議した。彼は直ちに切羽の高さを測定し、約一〇糎程度短かい長さに坑木を切り、支柱を立てた。坑木を切る時間に天盤が下がる度合を考えてのすばい動作である。その支柱は丁度天盤の高さにあうのである。後山は先山に示された長さで次々に坑木を切り、先山は要所所に支柱を立てて回った。必死の作業で漸やく天盤の沈下は止まり、二米の高さは一米位にまでなったが、とにかく採炭切羽は事なきを得た。その時ほど、熟練した老鉋夫の長年の経験を尊いと思つたことはない。

昨今、日本は高齢化が急速に進みつつあるという。人生豊かな高齢者の経験・知恵は、又尊重する必要があるのではなからうか。それで

こそ、調和のとれた社会の進展があるものと考えるのである。

### (七) 調査研究業務

入社して約三年後の昭和二十五年七月、一通りの石炭生産の第一線の業務を経験すると、次は調査研究業務であった。

当所は川崎町に大峰炭鉱、添田町に峰地炭鉱と二炭鉱があり、その総括としての鉱業所の本部が添田町にあったが、生産部門の鉱務課というところで、両炭鉱の生産統計や生産能力の改善調査研究、生産計画の検討などの業務の一翼を担うことになった。

毎日限られた生産現場で、三交代で真黒になっての業務から一時離れて、客観的に両炭坑の坑内各所を巡回し比較し、タイムスタディーなど動作研究や生産隘路の調査などを行った。偶々昭和二十五年頃より保安法の制定、鉱業法の改正などがあり、この前後より欧州、米



坑内の風景



燃えている硬山

など諸外国の文献や技術が続々と輸入されはじめるに及び、引続いて発生する労働組合の賃金要求、石油エネルギーに対抗するためにも、各炭鉱とも生産能力の向上、機械化が真剣にとりあげられ、新たな勉強を迫られたのであるが、二十七年三月再度生産現場に復帰するまでの一年半の間、採鉱技師の卵が、現場と理論の両面から少しずつ一人前に成長して行ったわけである。硬山は真赤に燃えていた。その頃の硬山及び坑内風景の写真があるので上段に掲載する。

### (八) 独身寮の生活

就職した二十二年当時は、敗戦後の石炭増産の国家的要請に、各炭鉱は人員の補充に大変であった。炭鉱の組織として管理監督する立場の職員と一般作業労働者の鉱員との区別がまだはっきりしており、独身寮も別々に運営されていた。

我々が入居した寮は、戦争から復員した者、小生のような採鉱技師の卵や坑外の事務関係のほか、私立の小学校を経営していたためその先生、病院の医師など多士済々で、定員二十名位のところ合宿（寮を合宿といっていた）する適当な建物がないため、三十名位が詰め込まれ、広間や物置部屋まで使用されてごった返していた。

坑内勤務者と坑外勤務者は米の配給量が異なるので、食事のときの井に盛った飯の量や弁当箱につめる飯の量が異なるために、不平のもとになった。仕方なく坑内勤務者の方から融通することもあった。

戦地から復員して来た者は三十才すぎの独身者もあり、その殆んどが結婚適齢期にありながら相手の女性がなかなか見つからず、従って気も荒かった。食糧難の時代である。公休日には寮の近くの畑から大根などの野菜を失敬してきては、それを肴に特配の酒やカストリ焼酎を、大部屋に数人集まってトグロを巻いては飲んで、戦争に負けたりさをはらしていた。

当時の世相としては、日本全国が食糧に飢えて闇物資を買いあさっていた時代であり、炭鉱は特配米などの配給で割合に落着きを取り戻しつつあったが、炭鉱生活の単調さと労働の苦しさに、そのはけ口を求めていたのであろう。坑内作業は危険を伴うが、最も多い怪我は落盤によるもので、一寸した切傷から、骨折などの重傷も時折発生した。その担当の係員は負傷報告を書き、病院に付添って行ってその全快を祈った。炭鉱は殺風景である。特に当時は戦争よりの復員もあり、独身男性が多く、若い女性が少ない関係から、購買会に勤務してしている若い女性や病院の看護婦たちは華やかに見えた。寮の若い職員は用もないのによく出入りした。仲には恋愛関係になり、結婚にまで進んだ者も数組あった。

狭い閉鎖的な社会の中で、良きにつけ悪しきにつけ、若い独身寮の職員の行動は注目され批判的ともなった。このような環境の中で約五年間の独身寮生活を送った。石炭で真黒になりながら、毎日の坑内勤務、三週間毎に回ってくる深夜の地底の生活を繰り返しながら石炭生産一途に過した我が青春とは、一体如何なるものであつたらうか。

少なくとも、敗戦後昭和二十六年の日米講和条約締結の頃までの混沌とした世相、食糧危機やインフレに見舞われ、一億の国民が敗戦のショックを受けて唯生きることのみに狂奔していた時代に、復興の原動力としての石炭生産は、筑豊地帯や他の産炭地で色々の矛盾をはらみながらも黙々と続けられ、或る者は生活の糧を求めて引揚者、戦災者が集まり、炭鉱の募集に応じて各地から労務者が、そして戦時中生活に従事した者や軍隊から復員者等、色々の人生のルツボの中に生活したその青春を、ほろにがく思い出すのみである。

そのようなわけで、一週間に一度の公休日は待遠しかった。若い寮生は、都会の文化を求めて博多や小倉によく出かけた。

現在のようにマイカーのない時代である。川崎町からは、博多に出

かけるより小倉に出かける方がはるかに便利である。同じ豊前の国なので、心情的にも小倉の街に指向した。国鉄に乗れば田川線、伊田線、筑豊本線、鹿児島本線と乗換えなければならないが、二十五年前後より漸やく整備されつつあった西鉄バスによれば、後藤寺から小倉迄直通のバスが運行されていたので、殆んどバスを利用した。

或る日曜日に、小倉に行くために、同僚と三人で田川市後藤寺バスターミナルに着いた処、今しも小倉行きバスが発車、動きはじめんとしていた。当時のこととて本数が少なく、次のバスは一時間以上待たねばならない。思わず三人は手を振って、「オーライ」と大声で口々に叫びながらバスに駆け寄った。しかし車掌はふり向いて我々の声を聞きながらも、その儘走り去った。三人は口々に「あれ程とまれと云ったのに」と怒った。オーライは炭鉱用語で炭車を止めるときの合図である。発車オーライバスガールの歌声に反して、炭鉱用語はどうしてか逆なのである。漸やく三人の中の一人が、「オーライと叫べばバスが発車するのはあたり前だなあ」と頭をかいた。小生を含めた二人も同様その間違いに気付くと、顔を見合せて声をあげて笑いこぼれた。どうにか炭鉱生活が身につきはじめた頃の、笑えないエピソードの一端までであった。